







無経

漫筆

社会の表裏

第十四回

鉢木畫

一郎

〔第十五回〕

虎を被る

包みうな太い脚を掛け

いつて漁師は上手に氣概を利かし

て際き、漁師が手宣の説明に警官は

驚いて、今のは本官が特別の證識を以

て渡す所だ。だが夫婦から

何うしたとの親切な語が妙に覺

はしむる誰か、イ、何

何時時が、いつたは吾輩は

いや、誰ちや!

「ハイお巡り様で御座ります。

馬鹿! 何を云ふ、本官が何時

明を歌つた? 「怒鳴りつて漁師

はさへとも、嗚らして漁師の群衆

へ這入つて来た。

オヤ之を本物のお巡りさんぞ!

オヤ之を本物の御宿は

## 兩陛下の銀婚を祝ひて 東京市が諸種の催し

全市青年團の旗行列

電氣局では花電車を運転

大婚を祝ひ

銀の花瓶

日本ムスメ來名  
一行本社を訪問す

アメリカ生れの

ヤンキ仕込みで皆ハイカラ

日本ムスメ來名

一行本社を訪問す

未曾有の大電飾

未曾在有の大電飾

未曾有の大電飾

(五) 千六百個の電燈を取つた廟宇にわたりて

牛が少く、娘さん(二十二)外七女が御子を元して

御子を元して







「あ、カシナルでござりますか」

（四）

必然の要求だ

都人への散策は

う云つて、すくにお迎へにやりま

さうですか。ざらよろしくおな

ひします。おまけに、丁度十

一番の紅茶子こぶもので

ざいます」

（五）

病院は、施設を耳にはさん

で、心臓の邊に當て見た。

（六）

「こりやいかん。おい、すぐに注

射の用意を……」

（七）

（八）

（九）

（十）

（十一）

（十二）

（十三）

（十四）

（十五）

（十六）

（十七）

（十八）

（十九）

（二十）

（二十一）

（二十二）

（二十三）

（二十四）

（二十五）

（二十六）

（二十七）

（二十八）

（二十九）

（三十）

（三十一）

（三十二）

（三十三）

（三十四）

（三十五）

（三十六）

（三十七）

（三十八）

（三十九）

（四十）

（四十一）

（四十二）

（四十三）

（四十四）

（四十五）

（四十六）

（四十七）

（四十八）

（四十九）

（五十）

（五十一）

（五十二）

（五十三）

（五十四）

（五十五）

（五十六）

（五十七）

（五十八）

（五十九）

（六十）

（六十一）

（六十二）

（六十三）

（六十四）

（六十五）

（六十六）

（六十七）

（六十八）

（六十九）

（七十）

（七十一）

（七十二）

（七十三）

（七十四）

（七十五）

（七十六）

（七十七）

（七十八）

（七十九）

（八十）

（八十一）

（八十二）

（八十三）

（八十四）

（八十五）

（八十六）

（八十七）

（八十八）

（八十九）

（九十）

（十一）

（十一）